

## 503 肺癌を含む重複癌症例の臨床的検討

兵庫医科大学第3内科

○藤岡 洋, 田村伸介, 中野孝司, 岩橋徳明, 前田重一郎, 戸川直樹, 相原信之, 波田寿一, 東野一彌

当科における肺癌を含む重複癌症例につき検討を加えたので報告する。

対象及び成績：1973年～1989年6月までの当科入院患者で組織診または細胞診にて診断を得た原発性肺癌508例中重複癌症例は40例で、内6例は肺多発癌であった。40例中男性24例、女性16例で年齢は38歳～85歳、平均年齢65.1歳であった。発症時期が1年以内の同時性のもの18例、異時性のものは22例であった。肺多発癌6例の内訳は同時性、異時性各3例で、異時性の3例については第1癌に対し加療され、少なくともPR以上の効果を得ている。肺多発癌中1例は他に子宮、膣、膀胱にも癌を認めた5重癌症例であった。肺癌の組織型では扁平上皮癌が24例と多く、他臓器癌は胃癌、子宮癌が多かった。また喫煙歴のある症例は28例と喫煙との関連も考えられた。

まとめ：1) 当科における肺癌を含む重複癌は全肺癌508例中40例(7.7%)であり、内肺癌多発癌は6例(1.2%)であった。2) 重複癌の肺の組織型では扁平上皮癌が多かった(60%)。3) 他臓器癌では胃、子宮、膀胱の順であり、女性では生殖器系の頻度が高かった。4) 喫煙歴のあるものは70%と多く、ことに肺多発癌では6例中5例がB.I.800以上の重喫煙者であった。

結語：今後診断技術及び治療成績の向上が予想され、重複癌の頻度は増加すると思われる。その背景因子、治療等詳細な検討が必要と考えられる。

## 505 肺癌を含めた重複癌症例の検討

福島県立医科大学第一外科

大石明雄、管野隆三、竹重俊幸、斎藤拓朗、外山雅文、菅野智之、薄場彰、井上仁、元木良一

目的と対象：1979年1月～1989年4月の間に当科で加療を受けた原発性肺癌177例中13例(7.3%)に他臓器癌を認めた。他臓器癌の合併は、肺癌の手術適応時と長期管理において留意すべき点であり、検討を行なった。結果：症例は男性10例、女性3例。年齢は55才から78才(平均63.4才)であった。肺癌の組織型は腺癌9例、扁平上皮癌4例であった。合併した他臓器癌は胃癌7例、大腸癌3例、子宮癌、乳癌、食道癌が各1例であった。他臓器癌先行は5例で大腸癌2例、胃癌、子宮癌、乳癌各1例であった。大腸癌、子宮癌の各1例は術後10年以上の症例であった。1年以内の同時例は6例で胃癌4例、大腸癌1例、食道癌1例であった。これらのうち肺癌手術時の精査で他癌が発見されたのが4例(何れも胃癌)であった。胃癌合併の3例は肺切除術が行なわれ、他の1例は肺機能の予備力低下があり楔状切除が行なわれた。食道癌合併例は食道癌手術時の精査で肺癌が発見された。食道癌はIV期で、肺癌は気管支内に発生した早期癌であり、食道癌に対する手術のみを行なった。肺癌先行2例の他臓器癌は何れも胃癌であった。

まとめ：肺癌と合併する他臓器癌は消化器癌多く、肺癌手術適応時、長期の術後管理においては消化器癌の検索が必須と思われた。

## 504

原発性肺癌手術症例における重複癌の検討

兵庫県立成人病センター 胸部外科<sup>1</sup>, 放射線科<sup>2</sup>

呼吸器科<sup>3</sup>, 病理<sup>4</sup>

兵庫県立淡路病院 外科<sup>5</sup>

○八田 健<sup>5</sup>, 坪田紀明<sup>1</sup>, 吉村雅裕<sup>1</sup>, 柳川昌弘<sup>1</sup>  
松岡英仁<sup>1</sup>, 植林 勇<sup>2</sup>, 高田佳木<sup>2</sup>, 大林加代子<sup>2</sup>  
加堂哲治<sup>3</sup>, 山本裕之<sup>3</sup>, 指方輝正<sup>4</sup>, 藤原 武<sup>4</sup>

目的：肺、他臓器重複癌及び多発肺癌について検討した。

対象：昭和59年7月から平成元年6月までの5年の間に行なった原発性肺癌の手術症例は293例で、その内二重複癌28例、三重複癌2例、計30例(10.3%)を対象とした。

結果：男性27例、女性3例であった。1)肺、他臓器重複癌は19例(同時性7例、異時性12例)。多発肺癌を1例含む)で、重複臓器は胃11例、喉頭、気管4例、直腸、膀胱、腎、乳房が各1例であった。同時性の癌に対する手術は臨床所見の進行している方を先に行なった。異時性のうち第2癌発生までの期間は2-10年(平均6.8ヶ月)であり、その内6例の期間は5年以上であった。予後は他病死が1例、癌死が6ヶ月、15ヶ月に各1例あるが、他の症例は1-57ヶ月(平均17.5ヶ月)生存している。

2)多発肺癌は12例で、第2癌が小細胞癌であった2例と、他の2例は手術不能となつた。

結語：1)肺癌手術症例の10.3%に重複癌を認めた。

2)肺癌手術後の経過観察においては、重複癌の頻度の高い胃、喉頭などに対する検索が必要と考えられる。

## 506

肺癌と胃癌の重複癌症例の検討

国立嬉野病院外科<sup>1</sup>、同内科<sup>2</sup>、長崎大学医学部第1外科<sup>3</sup>

○山下三千年<sup>1</sup>、木田晴海<sup>1</sup>、綾部公懿<sup>3</sup>、吾妻康治<sup>1</sup>、三根義和<sup>1</sup>、藤瀬直樹<sup>1</sup>、木谷崇和<sup>2</sup>

癌の診断や治療の進歩によって、長期の生存が得られるようになり、各種重複癌症例の増加と共に、肺癌と他臓器癌の重複癌症例をみることが多くなつた。我々の施設では、肺癌症例の蓄積はまだ少ないが、それでも肺癌と胃癌の重複癌症例の5例を経験し、臨床的検討を行なつた。

年令は60才、68才、72才、76才、78才で、性別は1例が女性で、他の4例は男性であった。肺癌の組織型別では、扁平上皮癌が4例、腺癌が1例で、Stage別ではIが3例、IIが1例、IIIa 1例であった。全例が両癌共に手術がなされ、3重複癌以上の症例はなかつた。肺癌の診断と手術が先行したもののが2例、胃癌の手術治療後、肺癌の手術をしたもの2例、両者の癌が同時に発見され、肺癌の手術を先に行なつたものが1例であった。

これらの症例で、発癌因子や遺伝的素因の検討や、同時性、異時性の判断も困難であるが、同時性の発見でどちらの癌の治療を先行させるかの問題や、予後や癌患者のfollow-upの問題点についても、文献的考察を加えて、報告する。